

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 15 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520858

研究課題名(和文)「工藤忠関係資料」による東北アジア近代史研究

研究課題名(英文) A study of the Northeast Asian modern history by the Kudou Chuu-related sources

研究代表者

山田 勝芳 (YAMADA, Katsuyoshi)

東北大学・東北アジア研究センター・名誉教授

研究者番号：20002553

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：中国の1910年代から1920年代初頭に関わる工藤忠が残した資料を、歴史研究の史料として活用できる形にして、研究成果報告書として『「工藤忠関係資料」による東北アジア近代史研究』を印刷公表できた。またこれによって、資料に関わる中国・日本の各種問題、具体的には白狼軍問題、東亜同文会の辺境通信員問題、日中合弁銀行の大東銀行の問題などについて、掘り下げた研究を進めることができ、新知見を提示できた。

研究成果の概要(英文)：I have published " A study of the Northeast Asian modern history by the Kudou Chuu-related sources " as results of my research , in the form that I could utilize the sources as historical materials for historical study . The sources to be concerned with from the 1910s through the early 1920s in China were left by Kudou Chuu . In this study, I could advance research which specifically investigated the various problems of China and Japan in connection with the sources about the problem of Bai-lang-jun , the frontier correspondents problem of Toua-Doubun-kai , the problem of the Daito Bank of Japan China joint venture Bank, etc. and was able to show new findings.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：中国近現代史 東北アジア近代史 白狼軍 第二・第三革命 甘肅省 工藤忠

1. 研究開始当初の背景

(1) 対象とする資料公開の必要性

「工藤忠関係資料」は、後に満洲国皇帝溥儀の側近として侍衛処長・宮内府顧問官となった工藤忠（初名は鉄三郎。1882～1965年）が残したもので、研究代表者（以下「山田」とする）が発掘し、命名したものである。これら資料の総合的な研究によって科学研究費研究成果報告書として録文・研究を出すことで、東北アジア近代史のこれら貴重な資料を歴史研究の史料として公開したいと考えた。

(2) 資料発掘以降の研究情況

まず、山田「一九二〇年中国共産党成立期の一史料について 工藤忠甘肅報告研究の一」（『集刊東洋学』100号、2008年）により、中国共産党形成期の上海における党組織形成等に関する貴重な工藤の甘肅からの報告（1920年9月3日付東亜同文会宛報告）について検討し、これによって石川禎浩『中国共産党成立史』（岩波書店、2001年）の主張する“1920年11月中国共産党成立説”を強化できる史料であることを論じた。また従来全く知られていなかった昭和史の貴重な資料「支那問題解決に関する建白書」を、山田「工藤忠主導 1942年5月の中国問題「建白書」の研究」（山田代表、科研費報告書『東北アジアにおけるユートピア研究』2009年）として公開した。頭山満を筆頭署名者として、林銑十郎、広田弘毅という二人の首相経験者と政治家・学者・軍人など有力者たちが署名し、かつ衆議院議員16名、貴族院議員14名が署名していた。この2点の資料だけでも工藤忠が残した資料の重要性が十分に窺われるのである。

(3) 工藤忠の評伝刊行後の研究の深化と東北アジア近代史研究の進展のために

これらの資料を残した工藤忠は、20世紀前半東北アジアの重大事件の多くに関わったり、その現場に立ったことがあるという極めて希少な経歴の持ち主であった。その評伝をま

ずまとめて以後の研究の基礎にしようと考え、『溥儀の忠臣・工藤忠 忘れられた日本人の満洲国』（朝日新聞出版、2010年）として刊行した。これをベースとして、さらに工藤忠の残した資料を史料化するとともに、それら資料が関係する東北アジア近代史の解決すべき諸課題が多々ある。本研究はこれらの解決のために、工藤資料を1910年代以降の東北アジアの重大事件の中に位置づけ、かつそれらを歴史研究の史料にするという作業を並行させて行うことが不可欠であるという認識の下に開始したものである。

2. 研究の目的

本研究は、工藤忠（当時「鉄三郎」）が作成した中国の第二革命（1913年）から第三革命（1915・6年）時期の資料、及び1920年代初頭、東亜同文会宛に甘肅省から出した通信などを著録・研究することによって、20世紀初頭の中国と日本の関わりや中国西北地域の諸状況を解明し、かつ「工藤忠関係資料」を東北アジア近代史研究の史料として公開することを目的とした。これらにより、従来史料が少なかった民国初年に活動していた大規模反乱集団の白狼軍や第三革命期の上海の動向や山東地域の動向、及びロシア革命直後の甘肅を中心とする中国西北地域の政治的・軍事的・社会的諸動向などについて、日本とソ連・欧米等の動向を絡めて研究することを可能にしたいと考えたのである。

3. 研究の方法

「工藤忠関係資料」の1点ごとに、必要な検討を加えつつ著録作業を進め、史料として公開し、かつ研究成果も示すようにする。同時に、工藤忠や関係者に関わる資料の探索を国内外各方面の関係所蔵機関において行う。各資料がもつ特性に応じてその主題に関わる個別研究を進めて、的確な解釈が可能になるようにする。少なくとも主要な諸問題につい

では個別研究を公表し、解釈の根拠を明示できるようにする。さらに、こうして得られた著録文・解釈・研究を刊行する努力をするが、出版事情が厳しいため、当面は科学研究費の研究成果報告書として出すことを図る。そして、この史料化された「工藤忠関係資料」を、当該時期の東北アジア近代史の中に位置づける研究も進める。

「工藤忠関係資料」中の奈良武次宛報告や東亜同文会宛報告は、いずれも手書きのカーボンコピーであり、正式報告書としてカーボン清書したものが奈良や東亜同文会に送られていた。「工藤忠関係資料」中にあるものの中には、薄い紙を何枚も重ねたカーボンコピーのため裏面の文字が重なって判読しがたい部分もかなりある。工藤が残したその他の資料も手書きのものが多く、史料とするために本文確定・著録が必要である。しかもいずれも他に全く知られていない内容なので、裏書きできる史料の存在もあまり期待できない。そのため、背景などの検討に多大な時間とエネルギーを投入することが必要になる。「工藤忠関係資料」のこのような資料的特性に応じて、多方面の検討を繰り返しつつ、本研究を遂行する。

4. 研究成果

まず大きな成果としてあげることができるのは、研究のまとめとして科研費研究成果報告書『「工藤忠関係資料」による東北アジア近代史研究』（2014年）を刊行できたことである。これには研究成果をまとめてあるので以下においては随時それによって記載したい。前掲拙著評伝の刊行によって工藤忠の存在がかなり知られるようになってきたが、まだ工藤の残した資料を含めて工藤をどう評価すべきかという点についても、さらには工藤が現場に立った東北アジア近代史の重大な事件における工藤の位置付けにおいても、工藤関係資料が公開されていないために議

論しがたいし、また中国など関係各国の研究者への資料提供もできなかった。同時に単純な資料の翻刻では史料化したとはいえない。そこに資料そのものに係る各種問題に対する研究を並行させる必要がある。

以下に具体的に研究成果を挙げていきたい。

(1) 白狼軍問題

工藤は1913年秋以降1914年初めまで河南省を中心とする大土匪集団白狼軍（大首領は白朗）に入って、革命派と白狼軍を結びつけようとした。さらに日本に帰ってから当時日本に亡命していた孫文と黄興に、同行した竇家法とともに白狼軍との連携を勧めたが、どちらも拒絶した。従来の研究では、袁世凱政権側の史料や新聞記事、その他によって、白狼軍と革命派の連携を強調する者が多かったが、実際に白狼軍内に入り、かつ孫文・黄興に接触した工藤忠が残した記録によれば、そのような理解は再検討されるべき事を明確に示した。さらに従来知られていなかった白狼軍の根拠地の霸王山についても明示できた。これらを山田「工藤忠資料から見た民国初年の白狼軍（白朗軍）」（『東北アジア研究』17号、2013年）で論じた。この論文によって、約100年前の白狼軍問題研究のレベルを一挙に引き上げる事ができたのは工藤が残した前半生の「手記」とそれに附属していた白狼軍の報告の存在だった。

(2) 第二革命～第三革命期の諸活動

1913年の第二革命において工藤が南京において柏文蔚の革命軍に参加した記録は必ずしも多くはないが、資料が少ないこの時期の状況を解明する上で貴重なものであること、及び1915年末から始まる第三革命では、特に12月6日に上海で起こった革命派による肇餘号奪取、江南製造局攻撃事件に関する詳細な青島守備軍参謀長奈良武次宛の報告が工藤の手によってなされ、この時期に関する資料として極めて重要であることを指摘できた。さらに山東方面での居正を総司令とす

る中華革命軍東北軍では、諸城方面の約1万の兵を率いるなど、その活動は際立っていた。工藤自身はこの山東革命に関する記述は残していないが、国民党関係の資料などにその活動が記載され、革命軍による諸城地域の制圧における主導的役割などを明確化できた。

(3)3回にわたる甘肅旅行の記録とその意義
白狼軍から帰り日本に帰国したときに、工藤は升允に出会って、革命派から復辟派に転身するが、升允の使命を受けて1914年に第1回甘肅旅行をする。この時の旅行記は「手記」の記載が主であるが、実は旅行の産物として甘肅省・山西省の状況の報告があり、それにより民国初年の甘肅・山西両省の諸相がかなり明らかになるのであるが、これら資料を著録・公開できた。次に工藤は1917年の張勳の復辟事件の際に北京で溥儀に会い、復辟の失敗後に升允が甘肅に行きイスラム勢力の支援を得ようとした第2回甘肅旅行(1917~1918年)の際には、困難な旅行全般を取り仕切って、甘肅・青海などで当時のイスラム有力者に実際に工藤が会って交渉し考えを聞き出すなどの役割をしたこと、そしてその旅行記録を支援した陸軍参謀次長田中義一などに提出したとみられるが、その中で甘肅での農業・商業活動展開の意欲を持つに至ったことがわかる。そして、東亜同文会の辺境通信員として寧夏に派遣された1920年からの第3回旅行においては、東亜同文会宛に多数の通信を行い、それらは転写、あるいは印刷されて外務省や同会会員に配布されていたこと、その中には1920年の上海における共産党成立に関わる極めて貴重な資料があり、また1920年12月の甘肅大地震に関する通信などもあり、この時期の甘肅の諸動向をうかがう第一級の資料といえる。さらに工藤は、この旅行中に各種の事業を実施し、それに関する記録も残した。

(4) 工藤の商業活動と大東銀行

工藤は甘肅において各種情報を通信したの

みならず、銀行・洋行設置、さらには絨毯工場設立なども図った。蘭州での銀行、寧夏での洋行設立に関して、詳細な金銭支出記録を残しており、この「支出簿」は北京 包頭 寧夏 蘭州の旅行諸経費を具体的に窺うことができる第一級の資料であり、今後のその史料としての活用の基礎を本研究で提供した。工藤の商業・銀行活動に関わったとみられるのが、日支合弁で北京に本店を置き、上海・天津に支店を置いた大東銀行であった。この銀行については従来全く解明されていなかったが、中国側パートナーは台湾系の林瑞騰及び第二革命の際に南京で活動した何海鳴であること、一方日本側パートナーは小出熊吉をトップとする共栄貯金銀行であり、そこから派遣されて上海支店長として大きな役割を果たしたのが、後のリコー・三愛グループ創設者の市村清であったこと、などを明らかにした。

そして、以上の成果を科研費研究成果報告書『「工藤忠関係資料」による東北アジア近代史研究』にまとめ、すでに主要研究機関・図書館、関係研究者などに送付し終えており、資料公開という目的もこれによって達成できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

山田 勝芳、溥儀の忠臣・工藤忠と二〇世紀前半の東北アジア 工藤忠研究が近代史研究にもたらすもの、(愛知教育大学歴史学会)『歴史研究』、査読無、59号、2013年、1-22、

<http://hdl.handle.net/10424/5183>

山田 勝芳、工藤忠資料から見た民国初年の白狼軍(白朗軍)、『東北アジア研究』、査読有、17号、2013年、49-75、

<http://hdl.handle.net/10097/55416>

〔学会発表〕(計2件)

山田 勝芳、溥儀の忠臣・工藤忠と二〇世紀前半の東北アジア 工藤忠研究が近代史研究にもたらすもの、愛知教育大学歴史学会 2011 年度大会、2011 年 12 月 10 日、愛知県刈谷市・愛知教育大学、招待講演

山田 勝芳、溥儀の忠臣・工藤忠と 20 世紀前半の激動 辛亥革命 100 年、満洲事変 80 年の年に東北アジア近代史を考える、東北アジア学術交流懇話会、2011 年 6 月 24 日、東北大学東京分室、招待講演

〔図書〕(計1件)

山田 勝芳、(株)ソノベ印刷・製本、『「工藤忠関係資料」による東北アジア近代史研究』(科研費研究成果報告書)、2014 年、全 340 頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 勝芳 (YAMADA, Katsuyoshi)

東北大学・東北アジア研究センター・名誉教授

研究者番号: 20002553

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: